慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥野信太郎の北京留学体験
Sub Title	Shintaro Okuno studying in Beijing
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.114, (2018. 6) ,p.120 (109)- 134 (95)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01140001-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野信太郎の北京留学体験

杉野　元子

はじめに

奥野信太郎（1899～1968年）は、慶應義塾大学文学部支那文学科（現在の中国文学専攻）の創設者である。その門下からは村松瑛、藤田祐賢、佐藤一郎、岡晴夫などの優秀な研究者が輩出した。筆者は他大学を卒業後、1986年に慶應義塾大学大学院文学研究科中国文学専攻に入学したが、当時この四名の教員は在職中で、雑談の折に、しばしば奥野信太郎の学殖の豊かさ、型破りな生き方、多芸多才ぶり、人柄の温かさなどについて、数々のユニークなエピソードを交えながら話をうかがうことがあった。奥野は研究者、教育者であるだけでなく、随筆家としても活躍し、硬軟取り混ぜた雑誌で健筆を振るった。またラジオやテレビへも出演して、軽妙洒脱な語り口で元祖タレント教授として人気を集めた。

奥野信太郎は1899年　陸軍大尉奥野幸吉の長男として、東京の麹町紀尾井町に生まれる。母・政子は橋本綱常（1845～1909年、東京大学医学部教授、陸軍軍医総監、日本赤十字社病院初代院長などを歴任）の長女である。奥野は小学校入学前に母親から『日本外史』の素読を受け、小学校入学後は、外祖父の家で著名な漢学者竹添井井からマンツーマンで漢籍の素読を受けるなど、徹底した英才教育をほどこされたが、漢学以外にも古今東西の書物を耽読し、該博な知識と鋭敏な感性を持ち合わせたスケールの大きな人物であった。しかし学術論文の執筆には興味を示さず、研究書は一冊も出版しなかった。そしてその代わりに、膨大な量の随筆群を書き残した。奥野の一番弟子であった村松瑛は、「随筆の中に、うまく学問をちりばめた場合が、先生の学問として成功した発表法なのであっ

た」と書いている[1]。また村松瑛は、吉川幸次郎と奥野信太郎を比べて、「「西の吉川、東の奥野」と言っても、学問的な権威で格段の差がついたのは当然であろう。どんなに鋭い指摘があろうとも、それが論文になっていない限り“学問”にはならない。〔中略〕文学者をもう少し広く文人と解釈すれば話は変って来る。吉川先生に北京の裏町の息づかいまで伝わるような文章を書いてみろと言っても無理である」と書いている[2]。奥野にとって随筆は自分の持ち味を活かす最適の表現手段であった。

奥野は存命中に二十冊以上の随筆集を出版した[3]が、没後も奥野作品の出版の動きは止まっていない。生前出版された単行本から文章を精選し、『奥野信太郎著作抄』（三田ライブラリー、1971年）、『奥野信太郎随想全集』（全6巻、別巻1巻、福武書店、1984年）、『奥野信太郎中国随筆集』（慶應義塾大学出版会、1998年）が編まれた。また須田正一は奥野が生前発表した単行本未収録の文章を探し出して編集し、論創社から『中庭の食事』（1982年）、『居酒屋にて』（1983年）、『女へんの話』（1983年）、『故都芳艸』（1984年）、『寝そべりの記』（1984年）、『東京暮色』（1984年）、『玩具の記憶』(1996年)を出版した。さらに、絶版となっていた本の復刊も相次ぐ。『現代知性全集（7）奥野信太郎集』（日本書房、1958年）は、『日本人の知性15　奥野信太郎』というタイトルで2010年に学術出版会によって複製された。『随筆北京』（第一書房、1940年）と『藝文おりおり草』（春秋社、1958年）は、それぞれ1990年と1992年に平凡社の東洋文庫に収められた。『はるかな女たち』（講談社、1959年）は、『女妖啼笑　はるかな女たち』というタイトルで1963年に講談社ミリオン・ブックス、2002年に講談社文芸文庫に収められた。近年では、近藤信行が、奥野による永井荷風関係の随想や評論を高く評価し、それらを集成した『荷風文学みちしるべ』（岩波書店、2011年）を出版した。

このように奥野は現在に至るまで作品が読み継がれ、日本の文学史上に大きな足跡を残したにもかかわらず、これまで奥野の人と文学について充分な考察がなされてきたとはいえない。奥野は友人に恵まれ、教え子に慕われたため、没後、『奥野信太郎回想集』（村松瑛ほか編、三田文学ライブラリー、1971年）が出版され、年譜や著作目録も編まれた。また没後に復刊された本や新たに編まれた随筆集の解説部分では、村松瑛、草森紳一、岡晴夫などが奥野と身近に接してきた教え子の立場から、人柄や文章の魅力を生き生きと伝えている。しかし異色の中

国文学者、手練れの随筆家として活躍した奥野については、さらにいろいろな角度から考察を深めていく必要があると考える。そこで本稿では、奥野信太郎研究の空白を埋めるための初歩的試みとして、奥野の処女随筆作品集『随筆北京』誕生をもたらし、奥野が随筆家としての道を歩むことを決定づけた二年間の北京留学に焦点を当てて論じることとする。

一 「在支第三種補給生」選定経緯

奥野信太郎は1920年4月、慶應義塾大学予科入学、1925年4月、同大学文学部卒業、同年9月、同大学予科教員となり漢文を担当する。奥野自作年譜には、在職中の1936年、「たまたま外務省在華特別研究員の選にあたった」ため、北京へ留学することになったと書かれている[4]。この奥野自作年譜の記述が踏襲され、没後に藤田祐賢が作成した「年譜[5]」においても、さまざまな人が奥野の北京留学について言及した文章においても、奥野は「在華特別研究員」の身分で留学したと記述されているが、この記述は正確さを欠いている。

奥野の留学期間は1936年７月から1938年4月までの約二年間であるが、初年度は「在支特別研究員（在華特別研究員）」ではなく「在支第三種補給生」の身分で滞在し、次年度1937年4月から「在支特別研究員」の身分で滞在した。「在支補給生」と「在支特別研究員」はともに、義和団事件の賠償金を基金とする外務省「対支文化事業」の一環として制度が発足し、「在支補給生」は1930年、「在支特別研究員」は1937年から派遣が始まった。補給生には第一種から第三種まであり、第一種は小学校卒業生、第二種は日本の中学校卒業生（旧制）もしくは第四学年修業生、第三種は日本の大学もしくは専門学校卒業生を対象とする[6]。

「在支補給生」、「在支特別研究員」の留学制度については、大里浩秋の労作によってその全容がかなり明らかになってきたが、補給生、特別研究員個々人の選定経緯についての研究は、濱一衛（「在支第三種補給生」）[7]、実藤恵秀（「在支特別研究員」）[8]など少数の人に限られ、まだ充分な研究がなされていない。奥野は「在支第三種補給生」と「在支特別研究員」の両方の身分を得て留学した唯一の日本人であることから、奥野が補給生と特別研究員に選定されるまでの経緯を明らかにすることは、中国留学史研究の面においても一定の意義があると考える。幸い、外務省外交史料館には奥野留学関連資料が比較的まとまった形で保存され

ている。そこで外交史料館の資料を新たに用いることにより、本節では「在支第三種補給生」選定の経緯、次節では「在支特別研究員」選定の経緯と中国東北部への研究旅行の詳細について明らかにする。

まずは、アジア歴史資料センターが公開している外交史料館所蔵の簿冊『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』（レファレンスコードB05015636700、H-5-7-0-5_1_006）をもとに、奥野の「在支第三種補給生」選定の経緯を見ていく。内容から判断して奥野が「在支第三種補給生」応募時に準備したと思われるのは次の①～⑥である。

①履歴書（1936年3月28日）

大学予科入学以降の履歴が自筆で書かれている。

②戸籍謄本（1936年3月27日）

本籍地は兵庫県津名群洲本町馬場町甲二百五十番地である。両親がすでに亡くなっているため、戸主は信太郎、その他に祖母くに、弟素三、妻智恵子、長女檀、長男正哉の名前がある。

③健康診断書（1936年3月28日）

判定は「健康体と認む」（原文の引用の際には、旧字体を新字体に改め、カタカナをひらがなになおした。以下同じ）[9]。身長は154㎝で、当時の男性としてもかなり小柄だった。

④研究計画書と参考論文

研究計画書「研究事項の概要とその方針に就いて」は留学当時の研究者奥野の力量と意気込みをうかがい知ることのできる貴重な資料なので、長くなるが一部を引用する。

> 文学史の含む諸問題中最も困難にしてしかも興味多きは比較文学の攻究これなり。〔中略〕漢土と我国との文化交渉中特に比較文学の一項に関してはその材料とするところのもの甚だ多きにも拘らず稍閑却せられたる傾きあるは諒に遺憾に耐へす。乃ち小生の研究対象はその資料を或は整理し或は分類しこれを微に探りこれを隠に起し以てその依るところと赴くところとを明示せんと欲するものなり。此にその著しき対象を二三列挙せんか王朝文学にありては万葉集と六朝唐文学との関係の如き鎌倉室町に入りては僧徒によりて齎

らされたる支那文学の影響により例へば唐物語或は李娃物語等の如き新しき形体の文学を生むに至りし径路等その前人の遺却して省みざりしものに重要なるもの殊に多きを見る。若しそれ徳川期に至らんが、夥しき戯曲小説と明清俗話体小説との関係は近来二三の篤学者によりてその論究を見るに至りしも、更に小生は遡源して唐通辞の文学的生活を明かにし、又最も唐通辞と不可分の関係ありし徂徠が蓐園の学風の淵源するところとして明清格調派の文学論を検討せんと欲するものなり[10]

奥野はこのように、日本の上代から近世までのさまざまなジャンルの文学を、中国との比較の視点を組み入れることによって再検討しようという、大胆で野心的な研究構想を立てていた。このまま脇目も振らず研究に没頭していれば、吉川幸次郎に比肩しうるような大学者が誕生したかもしれないが、好奇心旺盛な奥野は学究一筋というわけにはいかず、芝居見物に熱を入れ、食べ歩きを楽しみ、公園や市場をぶらつき、花街で芸妓と遊び、さらには北京で開業していた東亜病院長八木繁雄の妹・薫（帰国後の1938年に結婚）と出会って激しい恋に陥った。吉川幸次郎は北京留学時代（1928～1931年）を振り返り、「ぼくは北京に行くときに戒を二つ立てた。芝居を見ない、つまり劇通になるまい。それから料理の名前を覚えまい、料理の通になるまい」、「芸者屋というのは徹頭徹尾行ったことがない」と語っている[11]。奥野と吉川の人生観や価値観が大きく異なり、好対照をなしていることが、この二人の留学生活の様子からも顕著にうかがえる。なお、奥野は研究計画書とともに参考論文「真福寺本遊仙窟考勘記」（『史学』14巻4号、1936年3月）を附したが、筆書の同僚で中国文献学を専門とする髙橋智によると、この奥野論文は文献学を志す人にとって手本となる極めて質の高いもので、髙橋自身も若いときに読んで感銘を覚えたとのことである。

⑤成績証明書（1936年4月6日）

文学部文学科に三年間在籍したときの成績証明書である。当時は三段階評価でAが優良、Bが普通、Cが不合格であるが、奥野の成績はAが14、Bが14、Cがゼロで、けっして優秀とは言えない。「支那文学」は三年間続けて履修しているが、成績は第一学年がBとA、第二学年がBとA、第三学年がBとBである。卒業論文はA評価だが、テーマはダンテ『神曲』の研究であった[12]。「支那文学」の成績が振るわず、卒論でも中国文学をテーマとしなかった人物が、卒業後、大

学予科漢文科教員として採用されたというのは、不思議と言えば不思議である。奥野は予科一年次に父親、文学部一年次に母親を失うという不幸に見舞われるが、文学部時代を振り返って、自作年譜には「家産が自由になるところから、次第に浪費の生活がはじまった。大震災後の浮薄な世相におし流され、荒淫溺酒のため、次から次へと不動産をなくしていった。しかしまたさかんに古書を購求し、一生のうちもっとも自由大胆な生活をおくった」と書いている[13]。Aが14、Bが14というのは、授業に身を入れず、豪快に遊び回っていたという前提で考えれば、それほど悪くない成績と言えるだろう。文学部教員たちは、奥野が在学中に『三田文学』に発表した文章[14]などから奥野の漢学の素養が並々ならぬものであることを見抜き、それが予科教員としての採用につながったのかもしれない。

⑥推薦書（1936年3月30日）

慶應義塾大学総長小泉信三が外務省文化事業部長岡田兼一にあてた推薦書には、「教員としての成績極めて良好にして常に研究を怠らず今日に至り申候」と書かれている[15]。

奥野が①～⑥の書類を用意して応募したことを受けて、外務省文化事業部は選考に着手する。次の⑦～⑫は、選考を経て留学に出発するまでの関連資料である。

⑦身元調査報告書（1936年5月1日、5月8日）

自宅所在地の麻布六本木警察署長と本籍地の兵庫県知事がそれぞれ5月1日と5月8日に作成した外務省文化事業部長岡田兼一あて身元調査報告書が保存されている。麻布六本木警察署の身元調査報告書には犯罪歴がないことのほか、「近隣其他に就て内偵するも素行上の悪評を聞かず」、「性質温和なり」、大学教員として「教育に関しては相当の熱意あるものと認めらる」などと記されている[16]。兵庫県の身元調査報告書には、奥野が本籍地に居住したことがないため調査不能と記載されている。

⑧選考結果通知書（1936年5月22日）

小泉信三あてに奥野が「在支第三種補給生」に選ばれたことが通知される。留学の研究題目は「支那文学（特に比較文学に関する資料の探訪と其の研究）」、研

究場所は「北平」、補給期間は二年間、補給月額は100円（学費70円、手当30円）である。「在支第三種補給生」には、「普通のもの」と「将来外務省官吏たるへきもの」の区別があるが、1936年度は「普通のもの」が六名、「将来外務省官吏たるへきもの」が五名選ばれた。「普通のもの」に応募したのは十九名で、三倍ほどの倍率である。奥野は「普通のもの」六名の中で年齢が最も高く、学業成績は最も振るわない[17]。

⑨誓約書と身分証明書

誓約書には「学費等の償還を命せられたる場合に於ては本人及保証人連帯の上速に償還」するとあり、戸川明三と西川寧が保証人に名前を連ねている（図1を参照）[18]。この誓約書の他に、奥野、戸川、西川の本籍地の役所で発行された身分証明書三通も添付された。戸川明三（秋骨）は当時、慶應義塾大学経済学部講師兼大学予科教員（英語・英文学担当）で、奥野の恩師である。西川寧は同大学予科教員（漢文担当）で、奥野の親友である。西川は1938年度「在支特別研究員」に選ばれ、奥野と入れ替わりで二年間北京へ留学する。

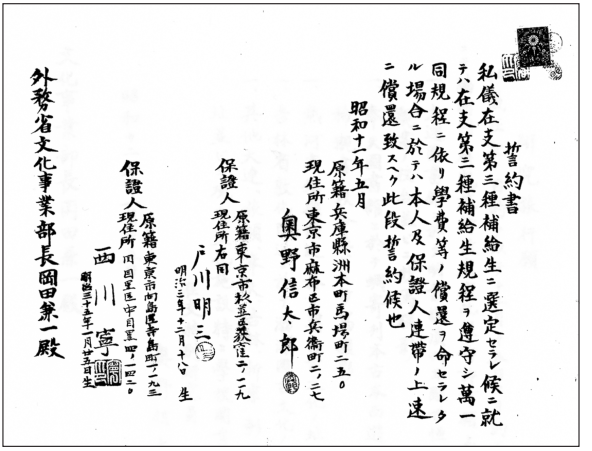

誓約書
私儀在支第三種補給生ニ選定セラレ候ニ就テハ在支第三種補給生規程ヲ遵守シ萬一同規程ニ依リ學費等ノ償還ヲ命セラレタル場合ニ於テハ本人及保證人連帶ノ上速ニ償還致スヘク此段誓約候也
昭和十一年五月
原籍兵庫縣洲本町五番地
現住所東京市麻布区市兵衛町二ノ三
奥野信太郎
保證人
原籍東京市杉並区荻窪二ノ二九
現住所右同
戸川明三
明治三年十二月十八日生
保證人
原籍東京市向島区寺島町二ノ九三
現住所同区中目黒四ノ一四二〇
西川寧
明治三十年一月廿五日生
外務省文化事業部長岡田兼一殿

図1
出典：外務省外交史料館所蔵『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』（レファレンスコードB05015636700、H–5-7-0-5_1_006）

⑩出発届（1936年6月18日）

外務省文化事業部長岡田兼一あて出発届によると、奥野は1936年7月12日に出発した。奥野は大学卒業後まもなく、坂東智恵子と結婚、二児をもうけていたが、1936年5月16日、智恵子が病気で急逝する。奥野は心痛のあまり一時は留学を断念することも考えたが、悲しみをこらえて旅立つことを決意する。

⑪学費と旅費に関する通知（1936年7月3日）

奥野は出発時、7月分学費・手当100円の他に、旅費130円が支給された。

⑫到着報告書（1936年7月30日）

大使館一等書記官武藤義雄が外務大臣有田八郎にあてた報告書によると、奥野は7月27日に北京に到着した。

二、「在支特別研究員」選定経緯と研究旅行

1937年からは、これまでの第一種から第三種までの補給生のほかに、新たに「在支特別研究員」の派遣が始まる。「第三種補給生」は、日本の大学、専門学校の卒業生を対象としていたが、「特別研究員」は日本の大学、専門学校卒業後、二年以上の研究歴がある人を対象としていた[19]。「在支第三種補給生」として留学中の奥野は、「在支特別研究員」に応募する。前年度、「在支第三種補給生」選考時に①～⑤の書類が提出されたため、「在支特別研究員」応募に当たっては同様の書類の提出は求められなかったと思われる。外交史料館に保存されている奥野の「在支特別研究員」選定関連資料は、簿冊『在華本邦人留学生補給実施関係雑件／選定関係第二巻』（レファレンスコードB05015563200、H-5-7-0-2_1_002）と『在華本邦特別研究員関係雑件／補給実施関係第二巻』（レファレンスコードB05015647700、H-5-7-0-6_2_002）に収められている次の資料である。

⑬推薦書（1937年4月6日）

慶應義塾大学総長小泉信三が外務省文化事業部長岡田兼一にあてた推薦書には、「人物優良にして志操堅固身体亦健全」と書かれている[20]。

⑭選考結果通知書（1937年4月10日）

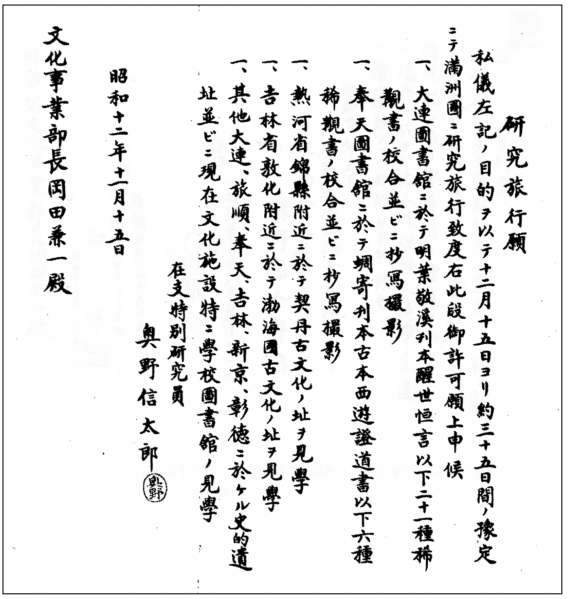
小泉信三あてに奥野が「在支特別研究員」に選定されたことが通知される。奥野の他には、麓保孝（第一高等学校教授）、稲葉誠一（東方文化学院東京研究所助手）が選定された。奥野の補給期間は1937年4月～1938年3月、補給年額は2400円で、第三種補給生のときと比べて倍増した。

⑮誓約書（1937年4月、年月日の日欄は空白）

「在支第三種補給生」選定時の誓約書と同様、戸川明三と西川寧が保証人に名前を連ねている。

次に奥野の研究旅行について見ていく。奥野自作年譜には「この年〔1937年

――引用者注〕の暮近く熱河を経て満洲各地を旅行す」と書かれている。これまでこの旅行の詳細は不明だったが、外交史料館の簿冊『在華本邦特別研究員関係雑件／補給実施関係第二巻』（レファレンスコードB05015647700、H-5-7-0-6_2_002）には自筆文書「研究旅行願」（図２を参照）と「旅費概算並びに日程」が保存されている。この二つの文書によると、奥野は1937年12月15日に北京を出発、天津、大連、奉天、新京、敦化、熱河のルートで各地の図書館や史跡などを訪れ、1938年1月18日に北京へ帰着する計画を立てた。旅行許可が下りたのは1937年12月23日であることから、実際に出発したのは「暮近く」の12月末である可能性が高い。旅費は649円95銭が支給された。「王道楽土」と謳われた「満洲」を訪れた奥野が何を見て何を感じたのか知りたいが、残念ながらこの旅行に関連する随筆類は残されていない。


研究旅行願

私儀左記ノ目的ヲ以テ十二月十五日ヨリ約三十五日間ノ豫定ニテ滿洲國ニ研究旅行致度右此段御許可願上申候

一、大連圖書館ニ於テ明業敬溪刊本醒世恒言以下二十一種稀覯書ノ校合並ビニ抄寫攝影
一、奉天圖書館ニ於テ嘗寄刊本古本西遊證道書以下六種稀覯書ノ校合並ビニ抄寫攝影
一、熱河省錦縣附近ニ於テ契丹古文化ノ址ヲ見學
一、吉林省敦化附近ニ於テ渤海國古文化ノ址ヲ見學
一、其他大連、旅順、奉天、吉林、新京、彰德ニ於ケル史的遺址並ビニ現在文化施設特ニ學校圖書館ノ見學

在支特別研究員
奥野信太郎（奥野）

昭和十二年十一月十五日

文化事業部長岡田桑一殿

図２
出典：外務省外交史料館所蔵『在華本邦特別研究院関係雑件／補給実施関係第二巻』（レファレンスコードB05015647700、H–5-7-0-6_2_002）

三、奚待園先生

奥野は留学先で知り合った人々について、折に触れて随筆に綴っているが、本節ではこれらの人々の中から、家庭教師奚待園との交流に絞って考察する。奥野の自作年譜には、北京到着後、「叔父高木陸郎が中日実業公司副総裁の職にあったので、北京孟公府箭桿胡同十三号の同公司公館に仮寓す」と記載されている[21]。奥野は随筆の中で当時の生活について次のように書いている。

当時ぼくは三間の部屋に住み、奥を寝室兼書斎とし、中央を応接間、左端の炕(カン)のある部屋を物置に使用していた。そして女中とボーイを雇い、さらにかかえ俥をもっていた。女中もボーイも給料は十円である。〔中略〕車夫は俥があちらもちであるから十八円払った。三人の使用人の給料あわせて三十八円である。しかもそれだけやっておけば食べさせる心配がいらないのであるから、まったくただみたいなものである。[22]

奥野は三間の部屋に一人で暮らし、男女二人の使用人に身の回りの世話をまかせ、外出時にはお抱え車夫の俥に乗って移動するという、まるで大企業の海外駐在員のような、優雅で恵まれた生活を送っていた。研究面においては、北京大学で聴講手続きをしようとしたが、事務員から大学の先生を家に招いて講義してもらう方法を提案され、費用が安かったのでそちらにした。奥野の家庭教師を引き受けたのは挙人の奚待園、音韻学専門の北京大学教授趙蔭棠、小説史専門の北京大学副教授（名前は不明）の三名で、月謝は、奚待園が毎日で10円、趙蔭棠が週二回で15円、副教授が週二回で10円であった[23]。使用人二名、車夫一名の給与が38円、授業料が35円で合計73円となる。奥野は留学中の生活について「毎月三百円ずつ送金があったから、とてもひとりぐらしでは使いきれなかった。さんざん思う存分の贅沢をしながら、さて月末に引出しをあけてみると、金がたくさんあまっているのであった」と回想している[24]。奥野がこのような恵まれた研究環境に身を置くことができたのは、外務省からの送金（一年目月額100円、二年目200円）のほかにも、どこからかは不明だが送金を受けていたからであった。

奥野は北京留学中、日本人社会から距離を置き、中国人社会に溶け込もうと心がけ、作家、大学教授、大学生、京劇俳優、芸妓など社会の幅広い層の人々と親しく付き合っていたが、その中でも家庭教師奚待園は奥野が後の妻となる八木薫に次いで、おそらくもっとも密に接した人物ではないかと思われる。奥野は1948年、恩師奚待園の死を悼んで「奚先生のこと」を書いた。この随筆を参照しながら、奚待園の人物像を紹介する。

乾隆帝第三皇子の子孫は、分かれて孟公府と盛公府の二公爵家となるが、奚待園は盛公府出身の満洲旗人であった。奚待園は少年時代、『紅楼夢』さながらの生活を送っていたが、いまではすっかり零落し、同じく名家出身の夫人と娘がい

たが、三人がそれぞれ語学の出稽古をしてやっと糊口の資を得るというありさまだった。奥野は毎日自宅で、奚待園の講義を受けるが、その授業風景について次のように活写している。

> 先生の紅楼夢講読はまことに興味の深いものであった。感興一時にいたるときには、椅子から立上がり、室内を歩き、身ぶり手ぶりをまじえながら世のなかにこのくらいおもしろい本はないといわれた。そういう時の先生の夢みる瞳にうつるものは、ありし日の若さであり、その若さを十分に輝やかさしていた、はなやかな豪奢そのものの影であったにちがいなかった。そう思って先生の元気のよさに対して、むしろ哀愁をおぼえているわたくしの表情などは、少しも先生にとっては問題にならなかった。[25]

奥野は奚待園の授業から「多くの利益をうけることができた」が、奚待園には阿片の業病があった。

> 阿片がきれてくると、日ごろ元気のいい先生はまったく憐れなありさまになってしまわれた。顔には苦渋のいろがうかび、口角から涎がたれることすらあった。そしてそういうときにはきまって急に腹痛をおぼえてきたからちょっと薬を買ってくるといって、なにがしかの金を請求されるのであった。そしてやがて再びもどってこられるときの先生は、先刻とはまったく別人のように颯爽として、輝くような顔のいろ艶を示された。[26]

阿片に侵された奚待園の生活は次第に困窮の度を深め、妻と娘も失い、孤独と絶望の中で晩年を過ごす。そして戦争終結を待たずして、北京西郊の元自動車置き場であった陋屋の中で息を引き取った。

「奚先生のこと」は月刊誌『中国よみもの』第1巻第3号（国際新聞社、1948年12月）に掲載されたが、この雑誌は1948年10月創刊、同年12月終刊の短命雑誌である。加えて奥野が生前、この作品を随筆集に収めなかったこともあり、長い間その存在が知られていなかったが、須田正一によって慶應義塾大学中国文学研究室のロッカーの中から文章が発見され、『玩具の記憶』(論創社、1996年)に収められたことにより、再び日の目を見ることになった。この作品に描かれてい

る、時代の荒波に呑み込まれ、転落の人生を歩んだ満洲旗人の姿は、孔乙己の姿と重なり、留学生奥野の前で熱弁を振るう奚先生の姿は、留学生周樹人を親身になって指導した藤野先生を思い起こさせる。「奚先生のこと」は魯迅の『孔乙己』と『藤野先生』を掛け合わせたような、味わい深い随筆である。

奥野の文章の中で、奚待園についての言及が最初に見られるのは「北平通信（二）── 小泉信三氏宛通信 ──」である。奥野はこの1936年12月31日付け小泉信三あて書簡の中で、奚待園の素性を紹介し、『紅楼夢』の講義を受けていることを報告したあと、「明治の初期に江戸名家の稟性道徳が東京に残存せるが如く、現在の北平の一部にはなおかかる前代の礼節と学問とが保有せられ居候。それを知ることのみを以て留学所期の目的と致しても惜しからずとさえ被存候」と書いた[27]。奥野は留学中、近代化の波にさらされ大きく変貌を遂げる北京の街の深底部で、伝統がしっかりと根を張り脈々と息づいていることを知り、心を揺さぶられる。そしてそれが帰国後の『随筆北京』出版へとつながるが、「前代の礼節と学問」を保有する奚待園との出会いは、このような奥野の北京像の形成と確立に大きく影響を与えた。奥野にとって奚待園は自らの北京像をゆるぎないものとする象徴的存在であった。

奥野は「机辺歳晩」（1952年）と「一九三七年春北京」（1956年）の中でも奚待園について触れている。「一九三七年春北京」は北京で個人指導を受けた先生たちの思い出を綴った文章であるが、奚待園については、「変わりゆく時世についてゆけず、こんなに落魄してはいたが、身についた気品は失っていなかったことが、ぼくには安らかな感じをあたえてくれた。北京という古い都で、この老人を相手に毎日毎日「紅楼夢」を読むことは、至極のんびりして、こんな気もちのいいことはまたとあるものではない」と回想している[28]。学問一筋ではない奥野には時間の余裕も心の余裕もある。奥野は奚待園という最適の案内人に導かれながら、『紅楼夢』の世界をのんびりと隅々まで探訪し、深い愉楽を味わった。「机辺歳晩」は年末に机の回りを整頓したときのことを綴った文章であるが、その中に次のような一節がある。

> まづ眼につくのは粗末な筆架である。紫檀製の山型をなした、それこそなんの奇もない品ではあるが、ぼくにとつてはこの筆架にたいするだけで、すでに留学時代のすべての思ひ出が生動する思ひがある。ぼくに紅楼夢の講読を

してくれた薄倖の挙人奚待園先生が、月謝以外五十銭、一円の阿片代を得るために、わが家からもち運んできた品の一つであるからだ。[29]

阿片代を捻出するために家の中のものを次々に売り払うところまで追い詰められた奚待園の姿は底知れぬ哀感となって胸を打つが、このような薄倖の挙人と過ごした日々は、奥野にとってかけがえのない至福の時間であり、留学時代の思い出の結晶となって心の底に残り続けた。

おわりに

本稿第一節と第二節では、外務省外交史料館に保存されているの資料を参照することにより、奥野の北京留学は一年目が「在支第三種補給生」、二年目が「在支特別研究員」の身分であったことを指摘したうえで、「在支第三種補給生」と「在支特別研究員」の選定にまつわる経緯を考察した。また留学二年目の中国東北部への研究旅行についても詳細に跡づけた。第三節では、これまでまったく注目されてこなかった満洲旗人奚待園と奥野との交流に光を当て、奚待園の人物像を明らかにしたうえで、奚待園との出会いが奥野の留学生活に多大なる影響を与えたことを指摘した。

本稿は奥野信太郎研究の第一歩である。今後は奥野が北京留学中に親しく接した日本文学翻訳者銭稲孫や音韻学者趙蔭棠などとの交流についても考察を広げていきたい。また奥野の北京留学の最大の成果であり、奥野の随筆山脈の最高峰に位置する『随筆北京』についても稿を改めて論じたい。さらに奚待園についても続きを準備している。奚待園について調べを進めるうちに、奚待園が中国文学研究の泰斗と仰がれた吉川幸次郎、日本の中国語教育に革新的な影響を与えた中国語学者倉石武四郎、書家、中国書道史家として大きな業績を残して文化勲章を受章した西川寧にも『紅楼夢』の出張講義をおこなったことがわかった。阿片に溺れ元自動車置き場の陋屋で孤独死した男は、日本の中国学を先頭に立ってリードしてきた俊英たちの先生でもあったのである。

註

1　村松瑛「奥野先生を偲ぶ」『藝文研究』27号、1969年3月、424頁。

2　村松瑛「奥野信太郎先生のこと」、奥野信太郎『随筆北京』平凡社、1990年、311～312頁。

3　奥野信太郎が生前に出版した随筆集を出版年順に列記する。『随筆北京』（第一書房、1940年）、『日時計のある風景』（文藝春秋新社、1947年）、『幻亭雑記』（世界文庫、1947年）、『随筆東京』（東和社、1951年）、『北京留学』（読売新聞社、1952年）、『柘榴の庭』（筑摩書房、1952年）、『こんにやく横丁』（文藝春秋新社、1953年）、『龍の横顔』（要書房、1954年）、『花寂しくして』（河出書房、1955年）、『亭主の月給袋』（新潮社、1956年）、『文学みちしるべ』（新潮社、1956年）、『かじけ猫』（章文社、1957年）、『藝文おりおり草』（春秋社、1958年）、『現代知性全集（7）奥野信太郎集』（日本書房、1958年）、『はるかな女たち』（講談社、1959年）、『浮世くずかご』（講談社、1960年）、『紅豆集』（桃源社、1962年）、『中国艶ばなし』（文藝春秋新社、1963年）、『おもちゃの風景』（三月書房、1964年）、『現代交際論――円満な人間関係――』（オリオン出版社、1967年）、『町恋いの記』（三月書房、1967年）、『詠物女情』（新潮社、1968年）。

4　奥野信太郎「年譜」『現代知性全集（7）奥野信太郎集』日本書房、1958年、280～281頁。

5　藤田祐賢「奥野信太郎年譜」『藝文研究』27号、1969年3月。藤田祐賢「年譜」村松瑛ほか編『奥野信太郎回想集』三田文学ライブラリー、1971年。

6　河村一夫「対支文化事業関係史：官制上より見たる」『歴史教育』15巻8号、1967年8月、88頁。大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」大里浩秋・孫安石編著『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房、2009年、114頁。

7　中里見敬「濱一衛の北平留学――外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態――」『言語文化論究』35巻、2015年11月、27～41頁。

8　孫安石「実藤恵秀氏の「在支特別研究員」の記録を読む」『中国研究月報』69巻4号、2015年4月、47～49頁。

9　東城愛男「診断書」『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』H0509-0268。

10　奥野信太郎「研究事項の概要とその方針に就いて」『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』H0509-0272。

11　吉川幸次郎「留学時代――質問に答えて――」『決定版吉川幸次郎全集第二十二巻』、筑摩書房、1975年、408頁・410頁、初出は『展望』189号、1974年9月。

12　藤田祐賢「年譜」、411頁。

13　奥野信太郎「年譜」、280～281頁。

14　奥野信太郎「森先生と支那文学」『三田文学』13巻8号、1922年8月、71～77頁。奥野信太郎「王次回と其作品」『三田文学』13巻9号、1922年9月、35～48頁。奥野信

太郎「支那文学に関する一考察」『三田文学』14巻3号、1923年3月、15〜26頁。

15 慶應義塾大学総長小泉信三より外務省文化事業部長岡田兼一あて推薦書『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』H0509-0308。

16 染谷麻布六本木警察署長より岡田文化事業部長あて身元調査報告書『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』H0509-0263。

17 「昭和十一年度第三種補給生選定に関する高裁案」（1936年5月16日決裁）『在華本邦人留学生補給実施関係雑件／選定関係第二巻』（レファレンスコードB05015562700、H-5-7-0-2_1_002）H0488-0008〜0009。奥野信太郎（37歳）の他に選ばれたのは、大東文化学院出身の山本正一（25歳）、森忠清（31歳）、伊藤千春（30歳）、東京帝国大学出身の永島栄一郎（28歳）、国学院大学出身の鈴木正蔵（26歳）で、いずれも奥野より若い。また成績も「良」が0〜2、それ以外はすべて「優」で、奥野より優れている。

18 奥野信太郎「誓約書」『在華本邦第三種補給生関係雑件／補給実施関係第六巻』H0509-0294。

19 大里浩秋「在華本邦補給生、第一種から第三種まで」、144頁。

20 慶應義塾大学総長小泉信三より外務省文化事業部長岡田兼一あて「在支特別研究員推薦の件」『在華本邦人留学生補給実施関係雑件／選定関係第二巻F2006092116343229731』H0488-0280。

21 奥野信太郎「年譜」、281頁。

22 奥野信太郎「故都芳草」『はるかな女たち』講談社、1959年、181頁。

23 奥野信太郎「一九三七年春北京」『かじけ猫』章文社、1957年、119〜122頁。初出は『学鐙』53巻1号、1956年1月。

24 奥野信太郎「楡と槐樹と柳の都」『中庭の食事』論創社、1982年、122頁。初出は『月刊週末旅行』2号、1960年6月。

25 奥野信太郎「奚先生のこと」『玩具の記憶』論創社、1996年、233〜234頁。初出は『中国よみもの』1巻3号、1948年12月。

26 奥野信太郎「奚先生のこと」、233頁。

27 奥野信太郎「北平通信（二）――小泉信三氏宛通信――」『玩具の記憶』論創社、1996年、160頁。初出は『三田評論』474号、1937年2月。

28 奥野信太郎「一九三七年春北京」、121頁。

29 奥野信太郎「机辺歳晩」『こんにやく横丁』文藝春秋新社、1953年、297頁。